



研究用試薬

## ヒストファイブ

第一抗体  
抗p63遺伝子産物モノクローナル抗体(4A4)(ヒストステイナー用)  
(動物種:マウス)

包装: 60テスト(12mL) Code: 713751

製造販売元

株式会社ニチレイバイオサイエンス

〒104-8402

東京都中央区築地6-19-20

TEL. 03(3248)2208 FAX. 03(3248)2243

- 本品は、自動染色装置ヒストステイナー用の試薬 第一抗体である。
- 特異性および抗原分布: ヒト組織中のヒト p63 遺伝子産物(63kDa)(変異型ならびに野生型)と特異的に反応する。p73 とともに、p53 遺伝子ファミリーのひとつである。正常では、前立腺基底細胞、乳管筋上皮細胞、重層扁平上皮や尿路上皮(移行上皮)等、多くの上皮細胞の基底細胞の核に反応がみられる。腫瘍では、子宮頸癌、咽頭癌など扁平上皮癌(特に低分化癌)に反応がみられる。
- クローン名: 4A4
- 抗体のサブクラス: IgG2a  $\kappa$
- 免疫原: ヒト p63 の遺伝子産物 1 番目から 205 番目のリコンビナントタンパク質
- 製法: 腹水より、プロテイン A クロマトグラフィーを用いて精製している。

## 1. 内容

第一抗体・・・抗 p63 遺伝子産物モノクローナル抗体(4A4)(動物種:マウス)。

液状。

ウシ血清アルブミン(BSA)と 0.1%アジ化ナトリウムを含むリン酸緩衝生理食塩水(PBS)にて、即時使用可能な抗体濃度に希釈済み。

1 バイアル中に 12mL を含む。

## 2. 使用目的

組織・細胞中の p63 の染色

## 3. 切片の準備

前処理(抗原賦活化)として 10mM クエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理が必要である(裏面参照)。

■参考: 組織の固定状況等により 10mM クエン酸緩衝液(pH6.0)の代わりにヒストファイブ 抗原賦活化液 pH9(Code: 415201 または Code:415211)を用いたオートクレーブ処理をすることで、より良好な染色結果が得られる場合がある(裏面の■参考参照)。

## 4. 使用方法

パラフィン包埋切片の免疫組織化学および免疫細胞化学染色に使用できる第一抗体である。

1) 他の試薬とともに試薬ラック(ヒストステイナー用)にセットし、染色を開始する。

2) 染色終了後、すみやかに2-8℃に保存する。

## 5. 染色方法の設定

反応時間を30分間とする。

## 6. 貯法

2-8℃保存。

## 7. 使用上又は取扱上の注意

ヒト由来の検体は、取扱者に感染をひき起こす危険性がある。従って、適切な取扱および廃棄法を用いるとともに、この免疫組織(細胞)化学染色法を施行するに際し、関連技術および操作法に充分習熟しておかなければならない。

試薬バーコードラベルを使用する場合は、自動染色装置ヒストステイナーのプログラムにバーコードラベル情報を入力する必要がある。本製品が未登録の場合は、下記データを入力(漢字のみ全角、他半角入力)し、登録すること。

専用ボトルに貼付されているバーコードラベル内の情報

試薬名	抗p63遺伝子産物モノクローナル抗体(4A4)
試薬略称(10文字)	p63-MM
バーコード	p63-MM
時間(分)	30



## 8. 主要文献

- (1) Jorge S. Reis-Filho, et al: J Clin Pathol 55:936-939,2002
- (2) Jorge S. Reis-Filho, et al: Cancer Cytopathology 99:172-179,2003
- (3) Meryem M. Koker, et al: Am J Surg Pathol. 28(11):1506-1512,2004
- (4) Rajal B. Shah, et al: American Journal of Clinical Pathology 122:517-523,2004
- (5) Patrick E., et al: Modern Pathology 18:645-650,2005
- (6) Poli o.B., et al: Int J Gynecol Cancer 16(1):152-155,2006
- (7) Lakshmi P. Kunju, et al: American Journal of Clinical Pathology 125:675-681,2006
- (8) Lorenzo Lo Muzio, et al: Cancer Investigation 25:464-469,2007
- (9) Victor Weng Leong Ng, et al: American Journal of Clinical Pathology 127:248-253,2007

### ■ 研究用としてのみ使用すること。

### ■ 切片の準備

1. 50℃で十分に湯伸ばしした切片(3-4 $\mu$ m厚)をシランなどのコーティングスライド上に張り付け、37℃の恒温器内で16時間以上乾燥させる。
2. 脱パラフィン → 親水化 → PBS
3. 前処理(抗原賦活化): オートクレーブ処理
  - ①緩衝液(下記記載)を耐熱性バットに入れ、切片を浸す。
  - ②バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
  - ③120℃、20分間オートクレーブ処理する。
  - ④圧力が十分下がった後、バットごと切片を取り出す。
  - ⑤バットの蓋をはずし、バットごと切片を常温に20分間以上放置し、ゆっくり熱を冷ます。  
※オートクレーブ処理後は、バットおよび緩衝液等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用し火傷に注意する。
  - ⑥スライドを緩衝液から取り出し、PBSまたはバッファーでよくすすぐ(3分間ずつ容器を2度かえるか、または洗浄ビンを使用する)。

- ・ 10mM クエン酸緩衝液(pH6.0)の作り方  
A液9mL+B液41mL+精製水450mL (用時調製)

A液: 0.1M クエン酸水溶液: 常温で保存可能 クエン酸一水和物( $C_6H_8O_7 \cdot H_2O$ )2.1g/精製水 100mL
B液: 0.1M クエン酸ナトリウム水溶液: 常温で保存可能 クエン酸三ナトリウム二水和物( $C_6H_5O_7Na_3 \cdot 2H_2O$ )14.7g/精製水 500mL
ここから必要な時に調製する。

### ■ 参考: ヒストファイン 抗原賦活化液pH9(Code: 415201またはCode: 415211)を用いたオートクレーブ処理の場合 (おもて面の■参考参照)

- ・ 抗原賦活化液pH9の作り方

・ Code: 415201 抗原賦活化液pH9 (調製済)は、そのまま用いる。
・ Code: 415211 抗原賦活化液pH9 (10倍濃縮)は、精製水で10倍希釈する。